

# 高大の学びをつなぐアクティブ・ラーニング — 高校生と大学生の学びの創発を目指した高大連携の取り組みを事例として —

## Connecting High School and University Learning through Active Learning: A Case Study of Collaborative Efforts between High School and University Students

菅井 篤  
Atsushi Sugai

東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科  
The United Graduate School of Education Tokyo Gakugei University  
r212002n@st.u-gakugei.ac.jp

### 概要

本研究では、高大連携における学びの充実を目指して、高校生と大学生が協働するアクティブ・ラーニング実践に焦点を当てた。高大連携講座では、アクティブ・ラーニングを導入し、生徒と学生が、協働して学び合う場を創り合い、対話活動を通じて相互に学びを深めていくことが目指された。本実践を通じて、学習者が学びのリスクを共に乗り越えながら、行動が変容していき、思考が広がっていったことが確認された。今後もこうした検討を重ねていき、さらに具体的な学習支援方法を探っていくことで、高大連携における学びが充実することが目指される。

キーワード：高大連携（University-High School Collaboration）、アクティブ・ラーニング（Active Learning）、対話的な学び（Interactive Learning）

### 1. 問題と目的

#### 1.1 問題の所在

高等学校教育と大学教育をつなぐ連携の在り方は、高大の接続のための取り組みとして、日本国内で様々なに行われている。目まぐるしく変化する昨今の大学入試制度が物語ることは、高大の接続において重要視されているのがトランジションの側面であり、そのため、大学の入学者選抜の方法が注目されがちであるということである。他方で、日本の生徒の高等教育機関（大学、短期大学、高等専門学校、専門学校）への進学率は2023年5月1日時点で84.0%（文部科学省、2023）にまで上昇し、過去最高を記録している。そのうち、大学（学部）・短期大学（本科）への進学率は61.1%であり、大学進学率は増加を続けている。このことは、円滑な高大接続の在り方として、大学側が実施する入学者選抜試験だけでなく、入学者側として、自らの意思で高等教育機関を生徒自身が選択していくことの必

要性が高まっていることを意味する。したがって、大学で何を学べるのかということを経験し、未来の学びにつながる多様で充実した教育の機会に、生徒自身が触れていくことは大切である。併せて、大学レベルの教育の学習機会を生徒に向けて、いかに拡充し、生徒一人ひとりの能力・意欲を大学側が育てていくのかということは、高大の学びをつなぐ上で大きな鍵となると言えるだろう。

大学の責務のひとつは、中等教育や卒業後の進路選択など、高等教育前後のトランジションを見据え、「生涯学び続け、主体的に考える力」（中央教育審議会、2012a）を育むことである。そのために、初等中等教育から高等教育に至るまでの一貫的な視点から、生きる力や確かな学力を捉えなおす必要性が指摘されている（中央教育審議会、2014）。主体性を育むことに重きをおく教育目標に係るこれらの提言と並行して、教育方法の重要性も強調され、高等教育におけるアクティブ・ラーニングに期待が高まっている。

アクティブ・ラーニングとは、教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称であり、発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である（中央教育審議会、2012b）。初等中等教育においても、2017年改訂学習指導要領において汎用的スキルや資質・能力をキーワードに、主体的・対話的で深い学びの実現のためにアクティブ・ラーニングの視点からの授業改善が強調されている。

## 1.2 研究の目的

このような教育潮流を受けて、今では多くの大学、学校でアクティブ・ラーニングが導入され一定の学習効果を上げるようになった（例えば、郡司，20220）。そこで本研究では、高大連携における学びの充実を目指して、高大連携事業の一環として行われた高校生と大学生のアクティブ・ラーニングによる学び合いを事例として、高大をつなぐ学びの在り方を検討することを目的とする。

## 2. 方法

### 2.1.1 調査対象者

東海地方 A 大学（私立教員養成系学部）に在籍する学部3年生の学生4名と、B 高等学校（A 大学系列校）に在籍する高校3年生の生徒10名の計14名を対象とした。この14名の対象者は、A 大学で開講された高大連携事業の講座の参加者であった。なお、対象の学生4名は、教育心理学を専門とする大学教員である筆者のゼミナールに所属している学生であった。

### 2.1.2 実施時期と対象者数

第1回目：2022年6月22日13:30～14:30

学生4名，生徒10名

第2回目：2022年6月29日13:30～14:30

学生4名，生徒9名（1名欠席）

第3回目：2022年7月13日13:10～14:10

学生4名，生徒10名

### 2.1.3 調査実施の依頼手続き

調査の実施にあたっては、対象大学の2022年度の高大連携事業として開講された計11回の講座のうち、筆者が講座を担当する各3回（全11回のうちの9回～11回目）において、対象となった学生と生徒、及び高大連携事業を担当するB 高等学校担当教諭に、本調査の実施を依頼し、全員から同意を得た。依頼では、調査データが学術研究以外の目的で使用されることはなく、対象者の私的情報は保護される点が説明された。

### 2.1.4 調査概要

筆者が担当した計3回の講座は、「ことば」を主たるテーマとして、学生と生徒がグループワークに取り組みながら対話を繰り返していくことで交流し、実施された。

第1回目の講座は、学生と生徒が打ち解けることを主な目的とし、学習に関する講義を筆者が実施した後に、自己紹介などのアイスブレイクをしながら交流をした。

第2回目の講座では、「高校卒業までにしたい10のこと」をテーマに、会合のプログラムの一つであるワールドカフェを実施した。ワールドカフェとは、メンバーの組み合わせを変えながら、小グループでの話し合いを繰り返す対話技法である。学生と生徒が自らの思いや経験を交え、話し合いながら、対話を繰り返すアクティブ・ラーニングを導入した。

第3回目の講座では、4グループに分かれ、「100年後の季節」をテーマに、我々の生活が100年後にはどのようなになっているかを話し合いながら、それぞれの季節の風景を1枚の絵に描いていく共同描画に取り組んだ。100年後はきっとこうなっているだろうという、それぞれの希望や予想を意見として出し合いながら対話し、学び合っていくアクティブ・ラーニングを導入した。

調査では、第2回と第3回の講座を実施した後、自由記述による質問紙調査を実施した。質問事項は共通して、質問1「本日の講座の前と後で、あなたにどんな変化がありましたか。」、質問2「本日の感想を書いてください。」の2項目とした。回答時間は、合計およそ10分間程度とし、参加者全員が回答時間内に書き終え、回答を終了した。なお、第1回目においても同質問紙調査を実施する計画であったが、講義及び自己紹介による学生と生徒の交流に時間を要し、時間の都合上、質問紙調査を行わなかった。

## 2.2 分析手続き

回答から得られた自由記述を調査データとして、KH Coder（樋口，2020）を用いて、それぞれテキスト分析を実施し、学びの特徴を析出した。次に、それらの結果を参考に、高校生と大学生の学びの特徴を考察し、高大をつなぐ学びの在り方の検討を試みた。

## 3. 結果と考察

### 3.1 上位語の抽出

質問1について、総抽出語は第2回目で学生が205語、生徒が581語、第3回目で学生が261語、生徒が666語となった。質問2では、総抽出語は第2回目で学生が212語、生徒が488語、第3回目で学生が226

語、生徒が696語となった。KH Coderは、活用のある語を全て基本形に直して抽出する。抽出された上位語の回数の合計を表1から表4に示した。

表1 第2回目の質問1「前後の変化」の  
上位語の抽出結果と記述者人数

学生		生徒	
抽出語	出現数	抽出語	出現数
考える	3	人	8
話す	3	楽しい	5
イメージ	2	自分	5
高校生	2	知る	5
最初	2	話す	5
思う	2		
卒業	2		

表2 第3回目の質問1「前後の変化」の  
上位語の抽出結果と記述者人数

学生		生徒	
抽出語	出現数	抽出語	出現数
自分	4	描く	7
学ぶ	3	自分	6
楽しい	3	グループ	5
授業	3	思う	5
場	3	絵	4
分かる	3	考える	4
		講座	4
		人	4
		話す	4

表3 第2回目の質問2「感想」の  
上位語の抽出結果と記述者人数

学生		生徒	
抽出語	出現数	抽出語	出現数
高校生	5	人	10
自分	3	楽しい	8
楽しい	2	思う	7
今	2	自分	5
思い浮かべる	2	話す	5
大学生	2	感じる	4
特別	2	高校	4
戻る	2	多い	4
話せる	2	普段	4
	2		

表4 第3回目の質問2「感想」の  
上位語の抽出結果と記述者人数

学生		生徒	
抽出語	出現数	抽出語	出現数
未来	3	思う	9
花粉	2	意見	8
考える	2	自分	8
子	2	グループ	7
描く	2	楽しい	5
話す	2	相手	5

### 3.2 特徴的な記述

次に、上位語がそれぞれどのような文脈で用いられているのかをKWIC (keyword in context) コンコーダンス機能で確認し、興味深い特徴的な記述を表5から表8に示した。なお、それぞれの下線は筆者が加筆した。

ワールドカフェを実施した第2回目の講座では、「①イメージを膨らませながら考えることができた」と「②テーマを話し合ったりグループを変えることによってそういった空気が柔らかくなった」とあるように、学生と生徒の両者が、対話を繰り返したことで徐々に場が和み、協働性が強化されていったことが確認できた。

共同描画を行った第3回目では、「③共同で何か新しいものを生み出したり、その場の状況から生まれたり、「場」からの主体性もあると気づいた」と「④みんなもそのようなことを描くと思いましたが、自然について描いている人が多かったので良い」という記述があった。これらのことは、学生と生徒が新たな気づきを通して、自身が持つ知識、ないしは概念を変化させ、体験的に再構築させていったことを示唆する。

このように、ワールドカフェや共同描画のような、対話を繰り返していく学び合いを導入したことで、学習環境が調和的に強化されていった。「⑤最初はあまりうまくしゃべれなくて不安だったけどみんな優しくてよかった」と学生が記したように、参加者は初めに学習へのリスクを抱えていた。しかしながら、「⑥自分の考えや思ったことも人に言えるようになった」と生徒に記されたように、学び合いに対する不安が多かれ少なかれ解消し、対話を通じて、学習へのリスクを共に乗り越えていったことがわかる。そのことで、参加者の行動が変容していき、自身の考えや意見を、他者へ伝えることができるようになっていったと言えることができる。

また、「⑦何が生まれて、何が発達しているのかは人それぞれだった」と「⑧1人でかんがえるのとみんなでかんがえるのは視野や規模が広がり、見えない発見がある」とあるように、多様な考えに参加者が対話的に触れることで、思考の広がりや深まりとしての学びが、参加者間で共創されていったことが確認された。一人ではできなかったことでも、他者と協働したことによって生まれた関係性が、学びを創造し、支えていたと判断することができよう。

### 3.3 考察

これらのことから、大学生と高校生が対話的に学び合う高大連携の取り組みにおいて、

1. 協働性の強化
2. 知識、概念の再構築
3. リスクの軽減と行動の変容

表5 具体的な記述  
(第2回目の質問1「前後の変化」の回答から)

## 【学生】

最初はしたいことが1つや2つしか思い浮かばなかったが、メンバーと話していくうちに「そういうこともやりたいね!」と①イメージを膨らませながら考えることができた。

## 【生徒】

講座を受ける前に前もってやりたいことを考えていたが、いざほかの意見を聞くと、「あ〜」となるものが多かった。大学生さんの「高校生の間にしかできないこと」と言われ、今しかできないことは何だろうと、ほかの人たちと考えた。最初は緊張してぎこちない空気だったが、②テーマを話し合ったりグループを変えることによってそういった空気が柔らかくなったのを実感した。

表6 具体的な記述  
(第3回目の質問1「前後の変化」の回答から)

## 【学生】

主体的と聞くと「自分から」ということが思いつき「個」の側にあるものと思っていましたが、③共同で何か新しいものを生み出したり、その場の状況から生まれたり、「場」からの主体性もあると気づいた。

## 【生徒】

「100年後を絵で描く」という課題が出されて私は自分の望んでいる学校生活を踏まえて描きました。④みんなもそのようなことを描くと思いましたが、自然について描いている人が多かったので良いと思いました。

表7 具体的な記述  
(第2回目の質問2「感想」の回答から)

## 【学生】

高校がキラキラしてまぶしくて、かわいかったです。高校生に戻りたくなくなりました。⑤最初はあまりうまくしゃべれなくて不安だったけどみんな優しくてよかったです。

## 【生徒】

普段かかわることのない大学生の方もいろいろな話ができて楽しかったです。前回よりは安心して授業をすることができて、⑥自分の考えや思ったことも人に言えるようになったので良かったです。

表8 具体的な記述  
(第3回目の質問2「感想」の回答から)

## 【学生】

未来百景はとても楽しく、様々な考えが読み取れて最高です。未来の程度は決まっていますが、⑦何が生まれて、何が発達しているのかは人それぞれだったので、「そうなら面白いな」と思える未来が見られてよかったです。

## 【生徒】

グループワークで自分が考えていなかったジャンルの話を聞いたり、そんな未来だったらいいと思う願望があったりとても楽しく授業ができた。⑧1人でかんがえるのとみんなでかんがえるのは視野や規模が広がり、見えない発見があると思った。何も考えずに言葉を作るとは難しいと思った。

## 4. 思考の広がりや深まり

の4点を学びの特徴として析出することができた。大学と高等学校と、それぞれ経験も立場も異なる参加者であったが、学びへの不安のリスクを抱えながらも、共に乗り越え、学び合いを実践していた。菅井(2016a, 2016b, 2019)では、小学校の学級内における学力差のある学習集団や、異学年・異年齢における児童の交流において、アクティブ・ラーニングでは、協働行為に本質的に基づきながら知識が構築、ないしは再構築されていくことが報告されている。加えて、学習者間で支え合いながら、相互に学習環境を創り合うことで、学びが深化していくことも報告されている。大学生と高校生によるアクティブ・ラーニングが実践された本研究においても、同様の結果が得られたと捉えることができるだろう。これらの結果は、学習参加者間の関係性や社会的で水平的な繋がりが、学び合いにおいて重要であることを示唆している。

## 3.4 展望と今後の課題

本研究は、活動に影響を与えたであろう授業者としての筆者の介入発話に関しての検討に至っていない。さらに、本調査対象の人数から、事例分析に留まっている。今後も実践を重ね、方法論的な検討を行い、具体的な学習支援方法を提案していく必要がある。

## 文献

- 中央教育審議会(2012a). 「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」(審議まとめ)
- 中央教育審議会(2012b). 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)
- 中央教育審議会(2014). 新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた 高等学校教育、大学教育、大学入学選抜の一体的改革について～すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせるために～
- 郡司菜津美(2022). 性教育指導観の理解を目指した授業の学習効果-ジグソー法を用いて-, 教育心理学研究, 70(1), 67-86.
- 樋口耕一(2020). 社会調査のための計量テキスト分析-内容分析の継承と発展を目指して-第2版 ナカニシヤ出版.
- 文部科学省(2023). 令和5年度学校基本調査の公表について菅井篤(2016a). アクティブ・ラーニングによる児童の学習方略の実践-小学校の漢字学習を事例として-, 教育デザイン研究, 7, 61-69.
- 菅井篤(2016b). 教え合い活動におけるリボイシグの効果-アクティブ・ラーニングの発話分析から-, 横浜国立大学教育学会研究論集, 3, 13-22.
- 菅井篤(2019). 主体的・対話で深い学びを目指した異学年交流-小学校での劇づくりにおける児童のパフォーマンスの実態-, 日本教育心理学会発表論文集, 61, 428.